

國學院大學學術情報リポジトリ

二十世紀前半の中臣祓研究：
企画展「おはらいの文化史」余滴

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大東, 敬明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002030

二十世紀前半の中臣祓研究

―企画展「おはらいの文化史」余滴―

大東 敬明

要旨

本稿は、明治末年から昭和二十（一九四五）年までの中臣祓研究の展開について、研究史を整理したうえで、そのなかでの國學院大學および宮地直一の役割を、研究史上に位置づけることを目的とする。

中臣祓研究は、明治末年から大正期にかけて、山本信哉、河野省三、清原貞雄らによって進められた。大正十五（一九二六）年には『延喜式』撰上千年を記念して皇典講究所と全国神職会の主催で、國學院大學において「延喜式撰上一千記念展覧会」が行われ、多くの中臣祓註釈が出品された。昭和に入ると、山本を中心に、河野、宮地直一らによって『大祓詞註釈大成』の編纂が始められた。この時期には、宮地、西田長男らによって、吉田家や鈴鹿家の文庫調査が進められ、中臣祓に関わる資料も見出された。これらの資料を用いて、宮地によって中臣祓の史的展開が示され、西田によって中臣祓を「自力」「他力」をもって分析する概念が提示されたことにより、現在の中臣祓研究の基礎が形作られた。

この周辺には、國學院大學、京都大学ほかで行われた神道関係資料の展示があり、神道に関する文献の目録化や、神道にかかわる資料の類聚事業があった。『大祓詞註釈大成』編纂期に、宮地らによってなされた中臣祓の基礎的な研究は、戦後も西田長男が引き続き行い、岡田莊司らによって引き継がれ、現在に至っている。

このような研究を進めてきた研究者には、國學院大學関係者が少なからず含まれており、本プロジェクトの目的との関連で見れば、國學院大學関係者は、常に中臣祓に関わって、その研究成果を世に問いつつ、現代にいたっているといえる。

キーワード

中臣祓、宮地直一、神道史学、國學院大學、『大祓詞註釈大成』

はじめに

本稿は、明治末から昭和二十（一九四五）年までの中臣祓の展開について研究史を整理したうえで、國學院大學および宮地直一の役割を、研究史上に位置づけることを目的とする。

中臣祓研究において、その展開は、おおむね神道史の展開に沿って論じられる。宮地直一（一八八六―一九四九）は明治四十三（一九一〇）年に『神祇史』^①を皇典講究所國學院大學出版部より出版し、国史学の一分野として、神道史（神祇史）の概念を示した。^②本稿において上限を明治末年としたのは、

これ以降を考えようとするためである。

研究史の整理にあたっては、現在に至るまで最も多くの資料を集めた『大祓詞註釈大成』^③が編纂された時期に注目したい。それは、この時期に、同書の編纂とともに、宮地直一を中心として中世における中臣祓についての研究も進められたためである。

さて、伝統文化リサーチセンターでは、平成二十二年七月二十六日から九月二十五日まで、企画展「おはらいの文化史」を行った。この企画展は「祓」の歴史的な展開を、儀礼次第、注釈書、道具をはじめ、その関連資料を通して示そうとしたものである。資料は、古代、中世、近世、近代と時代区分を

して展示した。近代は「祓の制度化と大祓詞・中臣祓研究」と副題をつけ、「大祓詞の研究と発信」と『大祓詞註釈大成』の編纂にわけて展示し、後者については、主に筆者が担当した。

『大祓詞註釈大成』の編纂は、平成二十年度に行った企画展「祭祀遺跡・神社祭礼・國學院の學術資産」における「文献にみる祓の世界」(五月十二日～七月二十六日)、平成二十一年度に行った「近代日本国家形成と國學院」(十月一日～十月二十八日)における山本信哉関連資料の展示、および本事業の中間成果公開シンポジウム「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」での報告「戦前の國學院大學における研究発信の一端―民俗芸能の実演・資料展示会を中心に―」(平成二十一年七月二十五日)をふまえたものであり、『大祓詞註釈大成』の編纂と、國學院大學における中臣祓関連資料の展示に関わる資料を展示した。

展示では、展示という形態への向き不向きなどを勘案し、それ以前にどのような研究があったのか、その周辺では、どのような調査が行われていたのか、といった神道史学史に関わる部分を割愛した。本稿で述べるのは、その割愛した部分である。

一、『大祓詞註釈大成』編纂以前

中臣祓についての研究において、早い時期に発表されたものに河野省三(一八八二～一九六三)が大正元(一九一二)年に発表した「中臣祓に就いて」⁽⁴⁾がある。河野は、同論文において「神道哲学」の基礎となり、所依となしたのは「神代巻」と中臣祓であるとする。そして、中臣祓は「神道哲学」においていかに「玄妙視」され、尊崇されてきたかは註釈書をみればわかり、それは百種を超えると⁽⁵⁾する。その上で、「罪科の解除が、罪障消滅の宗教的要求と一致する所あること」⁽⁶⁾、「中臣祓詞が道德的解釈を容るゝに都合よくありしこと」⁽⁷⁾、「他の祝詞と異りて、或る一定の祭事に局せざる余地あること」⁽⁸⁾、

「禊祓が、神道の儀式中、最も一般的にして、宗教的性質を帯べること」⁽⁹⁾など、中臣祓が尊崇された主な理由を九つ挙げている。河野には、この他に「神道哲学より観たる中臣祓」⁽¹⁰⁾がある。

また、蔵書家としても知られた河野は、中臣祓の註釈書を意識的に収集していた⁽¹¹⁾ようで、河野の研究は、この蔵書を用いてのものであった。この中臣祓に関わる蔵書は、國學院大學において、数回展示されている。これについては後述する。

このように河野が中臣祓の研究を行った背景には、中臣祓が神道史上において重要な位置にある古典であるというのみでなく、河野自身の神道教化研究とも関連がある⁽¹²⁾。

河野以前の研究では、山本信哉(一八七三～一九四四)が「土御門神道」⁽¹³⁾(明治四十五年～大正二年(一九一二～一九一三))のなかで、

此の藤原時代末頃から僧侶の修法の際や、陰陽師の祈祷の時に、經文や祈文を誦すると同じ様に中臣祓を唱へ、而も三反乃至五反も繰返し高声に読む様になつたといふ事は、広義の神道史、就中神祇研究者に取つて、大いに注意すべき問題であります⁽¹⁴⁾。

として、神道史上での中臣祓研究の重要性を指摘している。

宮地直一は、『神祇史』において「陰陽道との交渉」に一節をあて、その中で祓についてはふれているものの、「中臣祓」の名は挙げていない⁽¹⁵⁾。清原貞雄(一八八五～一九六四)は、大正四(一九一五)年に、「神道史と五行讖緯の説」や「守礼考」⁽¹⁶⁾において、陰陽師と中臣祓について言及している。これは、のちに『神道沿革史論』⁽¹⁷⁾の一部に位置付けられている。

『大祓詞註釈大成』編纂以前の中臣祓研究の上で、注目されるのは『延喜式』撰上千年を記念して皇典講究所・全国神職会主催で、大正十五(一九二六)年十一月三日に國學院大學において行われた「延喜式撰上千年記念展覽會」⁽¹⁸⁾である。河野は、この展示に際して、大祓詞や中臣祓に関する蔵書を出品している。さらに『國學院雑誌』三三卷三号には「中臣祓について」との

河野の談話が掲載され、河野が所蔵する大祓詞・中臣祓の文献を挙げている。¹⁷⁾

西寅夫はこの展覧会の目録を基本として大祓詞・中臣祓の研究をはじめ、¹⁸⁾

昭和六年に『禊祓の研究』¹⁹⁾を刊行している。同書の第二章「陰陽道の禊祓に及ぼせる影響」において西は、齋藤勳『王朝時代の陰陽道』、清原貞雄『神道沿革史論』²¹⁾、山本信哉「土御門神道」・「大麻に就きて」²²⁾を参照しつつ、中臣祓が僧侶・陰陽師にも用いられてきたことをあげ、陰陽道が神道史上、重要な研究題目であることを述べる。第四章「中臣祓の概要」は『國學院雜誌』に発表された「中臣祓の文献について」²³⁾とほぼ同内容である。同論文では、『阿婆縛鈔』に引用される「注中臣祓」、または『中臣祓訓解』をはじめとして、大祓詞・中臣祓に関する註釈を成立年代順に配列して解説したのち、大祓詞・中臣祓に関わる註釈の目録を付している。西の研究は、断片的ではあるが陰陽道との関わりにはじまり、「注中臣祓」「中臣祓訓解」などの中臣祓・大祓詞の註釈を通じて、その展開を近世まで概観することができる。西はのちに、『禊祓文庫第二冊 大祓詞概説』²⁴⁾を刊行する。この巻末には「大祓詞に関する書目解題」を付している。ここでは先述の「中臣祓の文献について」を増補した上で、略解題を付している。

このころまでの中臣祓研究の印象を記せば、多くは、陰陽道との関わりか、近世の版本を用いての研究が主であった。これは中臣祓の註釈書のうち、近世に出版された中臣祓註釈が、数量的に大部分を占めること、中世における中臣祓に関する資料の紹介が十分なされていなかったことによるものであるう。

二、『大祓詞註釈大成』編纂期

『大祓詞註釈大成』については、以前に考察したことがあるので、²⁵⁾ここでは概略のみ記す。

昭和七（一九三二）年、金光教の要職をつとめた佐藤範雄（一八五六～

一九四二）の喜寿を記念して『大祓詞註釈大成』を刊行すべく、佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会が設立された。

『大祓詞註釈大成』は昭和十（一九三五）年に内外書籍より下巻が刊行され、十三（一九三八）年に中巻、十六（一九四一）年に上巻が刊行されている。これは宮地直一によって発案され、宮地のほか、山本信哉・河野省三が編者となった。筆者は、このうち中心となって編纂を行ったのは山本信哉であると考えている。

『大祓詞註釈大成』には、一六種の大祓詞・中臣祓の本文、六五種の註釈書が収められ、註釈書は思想史の立場から両部神道・伊勢神道・卜部神道・吉川神道・垂加神道・復古神道・独立派に分類される。この『大祓詞註釈大成』は現在に至るまで、大祓詞・中臣祓の最も大部な資料集成となっており、宮地直一、山本信哉、河野省三によって付された解題は、中臣祓の基礎的研究として高く評価されている。²⁶⁾

また、同書によって、中世から近世までの祓をめぐる神道思想や儀礼の変遷が通覧できる点においては、神道史及び神道思想史研究の上において貴重である。

『大祓詞註釈大成』の編纂とはほぼ同時期の昭和八（一九三三）年、神宮文庫所蔵『中臣祓注抄』²⁷⁾の複製本が神宮司廳より刊行されている。これに付された宮地直一の『中臣祓注解説』は、『中臣祓注抄』の研究の基礎となるものである。以前、拙稿で述べたことがあるが、この時期、宮地は神宮文庫所蔵の中臣祓や祓集を書写（敷き写し）させている。²⁸⁾この中には、先述の『大祓詞註釈大成』の底本となったものもある。

翌年、宮地は神書叢刊の第一として鈴鹿太郎所蔵『三国最上之祓』²⁹⁾の複製を刊行し、十三年には第三として御巫本『中臣祓』³⁰⁾の複製を刊行している。これらの複製に付された解題（『中臣祓注解説』、『三国最上之祓の研究』、『御巫本中臣祓説』³¹⁾）もそれぞれの先行研究として参照すべきものである。特に『三国最上之祓の研究』では、中世までの中臣祓の展開を通史的に示している。

そして本文を伊勢神宮の神職たちが中臣祓を受容する中で改変した「伊勢流」、吉田兼俱が改変し、吉田神道の広まりとともに流布した「吉田流」に分類している。ここで示された中臣祓の展開は、現在でも用いられている。

昭和十六年に出版された宮地直一の『神祇史大系』⁽³³⁾では、この内容をふまえてか、陰陽道との交渉、伊勢神道、吉田神道、近世の通俗神道を説明するなかで中臣祓についてふれている。ここにおいて、中臣祓の展開が、宮地の構想する神道史の枠組みの中に位置づけられたといえよう。

次に、この時期の中臣祓研究で注目されるのは、吉田神道研究との関わりである。宮地は高校時代に鈴鹿家に下宿していたことから、当主の鈴鹿太郎とは兄弟のように仲がよく、鈴鹿家文庫や吉田家文庫の調査を行っていた。⁽³⁴⁾

この成果は、『三国最上之祓の研究』のなかに挙げられた鈴鹿太郎所蔵の中臣祓の目録や、『大祓詞註釈大成』⁽³⁵⁾のうちに翻刻され、宮地が解題を執筆した『中臣祓 平仮名本』『中臣祓 仮名附本』⁽³⁶⁾にみることができるといえる。

國學院大學において宮地直一の教えをうけた西田長男⁽³⁷⁾（一九〇九—一九八一）は、昭和十一（一九三六）年七月より、宮地の紹介によって鈴鹿家文庫の調査を行ない、この際に見出した資料をもとに、『慶長勅版中臣祓と吉田家に於ける神書の開版』⁽³⁸⁾（昭和十三年）を執筆している。同年、『吉田叢書』全五編の刊行が企画されると、西田は秋より実際の調査・校訂作業や解題の執筆を行った。同十五年には宮地直一の監修で、『吉田叢書 第一編 神道大意』⁽³⁹⁾が刊行されている。

西田は同十四（一九三九）年、「神道史の理念」と題した論考のうちで「私家神道の成立—罪の概念を通路として」⁽⁴⁰⁾を執筆する。ここでは『延喜式』所収「六月晦大祓」（大祓詞）にみえる罪の概念に触れながら、中世神道、特に中世の中臣祓の受容と展開について詳細に論じている。同論で、西田は石清水八幡宮所蔵の顕海本『中臣祓聞書』の「稜給ト云タルハ、此方稜フニアラス。此ノ稜ノ文ヲ読ハ、神ノ来テ稜ヒ、神来テ清メ給ナリ。賜ノ字ノテニハ肝要也。」⁽⁴¹⁾を引用して、「これによって知られる如く、吉田神道が他力易行門

の影響を受けつゝ、陰陽道が「ハラヒマラス、キヨメマラス」とあるところを、「ハラヒタマヘ、キヨメタマヘ」と転回せしめたところ⁽⁴²⁾として「ハラヒタマヘ、キヨメタマヘ」を仏教の概念である「他力」をもつてとらえ、吉田神道では特に「給」の方を撰取して他力門的に解釈することによって一家の神道説を樹立するとともに、伊勢神道ではこれに対して同じく両部神道の説を受用しつゝ、特に「申」の方を採用して自力門の立場より一派の説を唱道することになった。⁽⁴³⁾

とする。この「祓給」とあるものを他力門、「祓申」とあるものを自力門とするのは、現在でも「他力祓」「自力祓」として、中臣祓の本文を分析する際の基準となっている。⁽⁴⁴⁾さらに西田は「神道の死の観念と仏教との関係—三種大祓の成立を通路として」⁽⁴⁵⁾において、「三種大祓」について述べる過程で中臣祓についても整理し、天台宗や真言宗が中臣祓を取り込んだ背景には、浄土宗への対抗や末法適応性の強調があったとする。

このほか、この時期には河野省三が『中臣祓と民族精神』⁽⁴⁶⁾を刊行し、萩原龍夫（一九一六—一九八五）が「中臣祓の史的発展」、中村直勝（一九九〇—一九七六）が「大祓祝詞の一断簡」⁽⁴⁸⁾を発表している。河野は、日本人の民族精神を明らかにするという目的のもとに、大祓詞や中臣祓の註釈やその史的变化を整理し、神道における中臣祓の重要性を述べている。特に、近世以降の中臣祓の展開については、河野以後、通史としては論じられていない。

萩原は、古代から吉田神道までの中臣祓の展開を思想史の視点から分析し、吉田神道における中臣祓について、詳細に論じている。ここでは中臣祓の成立には陰陽師が関与することを指摘している。戦後、岡田米夫もこの説をとる。

中村は、金剛寺所蔵の大祓詞（中臣祓）の断簡を紹介し、これが神宮文庫所蔵『中臣祓注抄』に次いで古い写本であること、傍註に仏教的な解釈がみられることを指摘する。

以上、『大祓詞註釈大成』の編纂から終戦までの時期の研究を概観すると、

『大祓詞註釈大成』や神書叢刊などで中臣祓に関わる多くの資料が刊行されたこと、宮地によって中臣祓の史的展開が明確に示され、西田によって中臣祓を「自力」「他力」をもって分析する概念が提示されたことで、中臣祓研究の基礎が形作られたといえる。

次に宮地、西田、萩原による中世における中臣祓の研究が盛んになってきたことが注目される。これは吉田家や鈴鹿家文庫の調査と呼応するものである。なお、同時期に西田長男、近藤喜博、萩原龍夫らによって中世神道研究がすすめられ、先駆的な業績を上げている。

反対に、河野省三以後、現在に至るまで近世に刊行された中臣祓註釈についての研究は少ない。

三、中臣祓研究の周辺

本節では、中臣祓研究の周辺として、神道・神祇に関する資料の展示や、書籍の目録化や類聚と中臣祓との関わりについてみておきたい。

・中臣祓と神祇・神道史関連資料の展示

先述の通り、大正十五年十一月三日に國學院大學において「延喜式撰上一千年記念展覧会」が行われた。この展覧会は、田邊勝哉、山本信哉、澤田章、植木直一郎、河野省三、岩橋小彌太らが中心となったもので、二八〇点ほどの資料が展示された。河野は、自らが所蔵する大祓詞や中臣祓に関する蔵書を出品している。⁽⁴⁶⁾

昭和十一（一九三六）年一月二十四日から二十六日には、皇典講究所初代総裁有栖川宮熾仁親王の五十年祭並びに、國學院大學講堂落成を記念して「国体及び神道に関する書籍展覧会」が國學院大學で行われている。同展の目録を参照すると、「延喜式系統」の研究書に分類された資料のうちに『中臣祓注抄』（複製）、「三國最上大祓」をはじめとして國學院大學図書館所蔵の資料が展

示されている。同年十月十六・十七日には、國學院大學四十六周年記念のために開催された「國學院大學学友会総合展覧会」の一部として、「国体及び神道に関する重要書籍展覧会 中臣祓註釈之部」が行われている。ここでは、河野省三の収集した中臣祓註釈一二四点を伊勢系統、卜部系統、垂加系統、国学系統、白川系統、両部系統、儒学系統、吉川系統、独立系統に分類して展示している。⁽⁴⁷⁾ 管見の限り、現在に到るまで、これほど多くの中臣祓註釈が展示された例はない。特にこの展示は、近世に成立した中臣祓注釈を多く、出品している点が注目される。

同年十一月二十一・二十三日には、京都帝国大学文学部陳列館において、「神祇並神道史に関する展覧会」が行われた。これには出雲路通次郎、猪熊信男、中村直勝、宮地直一、東大寺、神宮文庫、叡山文庫、高野山三昧院、同親王院をはじめ、多くの出品者があった。目録には、『中臣祓』（梵舜写、元和六年、鈴鹿三七所蔵）、『中臣祓』（仮名書本）（天文五年、吉田兼右写、鈴鹿三七所蔵）、『中臣祓』（天文古写本、猪熊信男所蔵）、『中臣祓』（大永三年、清原宣賢写、宮地直一所蔵）、『二月堂呪師祓』（慶長十一年写、東大寺図書館）などがみえる。⁽⁴⁸⁾

この展示は、翌年、翌々年にも「第二回神道史資料展覧会」「第三回神道史資料展覧会」として行われている。⁽⁴⁹⁾ 「神祇並神道史に関する展覧会」には、鈴鹿三七所蔵の中臣祓が展示されている。この中には、宮地直一が、『三國最上之祓の研究』や『大祓詞註釈大成』の解題において用いたものもある。⁽⁵⁰⁾ このことから、これらが展示される背景には、神道史上における中臣祓に対する興味が深まっていることとともに、宮地によって鈴鹿家の文庫の調査が行われたことも関わると考えられる。

なお、皇典講究所、國學院大學、京都帝国大学で行われた神道資料展示のほか、本稿では詳述できなかったが、昭和七年五月一日から三日まで神宮皇學館で行われた「神道資料展覧会」⁽⁵¹⁾、同八年十一月二日から八日まで、石川県立図書館・石川県図書館協会・石川県神職会の共同主催で、同県の県立図

書館・県商品陳列館で行われた「神祇に関する展覧会」⁽⁵⁵⁾、昭和十五年十月二十六日から十一月八日まで大倉集古館で行われた「紀元二千六百年奉祝神道美術展覧会」⁽⁵⁷⁾などがある。

このような展示によって、周知される資料もあつたであろうし、陳列品の選定には、ある程度、当時の研究者の関心を反映していることが考えられる。よって、当時の神道史学と資料とのかかわりを考える上では、今後、資料展示についても、学問史との関連をみてゆく必要がある。

・中臣祓と神道にかかわる書籍目録および神道大系の編纂事業

昭和十年代は、佐伯有義編『神道分類総目録』⁽⁵⁸⁾や加藤玄智編『神道書籍目録』⁽⁵⁹⁾といった、神道にかかわる文献の目録が刊行された時期である。これらによって、神道に関わる文献が把握できるようになった。両書にも、中臣祓に関連する書籍が多数あげられている。さらに、時期を同じくして下中弥三郎編『神道大辞典』⁽⁶⁰⁾が刊行されている。『神道大辞典』では、河野省三が「中臣祓」の項目を執筆し、ほかに五十種ちかくの中臣祓註釈書が掲載される。

これ以前に井上哲次郎は「神道大蔵経」編纂の必要に就いて⁽⁶¹⁾などで、神道にかかわる文献を集めた「神道大蔵経」を編纂する必要性を述べている。加藤玄智は『神道書籍目録』の編纂を大正年間から始めたとしている⁽⁶²⁾。これらが編纂される背景には、神道研究が進むにつれて、研究の基礎となる資料の把握が必要となつていったことが考えられようか。

「神道大蔵経」のような、神道にかかわる文献を集めて刊行しようとしたものが、昭和十七年から、国民精神文化研究所（のち教学練成所）において進められていた、「神道大系」編纂事業である⁽⁶³⁾。

これは宮地直一が提言し、河野省三、西田長男、萩原龍夫らが関与していた⁽⁶⁴⁾。宮地がこれを計画したのは、戦災によって神道に関わる資料が失われてからでは、取り返しがつかないと考え、これらを校訂、刊行することによって後世に伝えようとしたためである⁽⁶⁵⁾。

昭和十七（一九四二）年二月十六日に三笠宮崇仁親王及び閑院宮春仁王が国民精神文化研究所を訪れた際に資料展示が行われ、「神道大系」編纂関係資料も展示されている。この展示の目録を見ると、吉田神道に関わる文献として『祓抄』（写本一冊、吉田兼俱、東京帝国大学神道研究室所蔵）、『中臣祓』（写本一卷）、『神宣大祓』（写本一冊）、垂加神道に関わるものとして『中臣祓風水草』（写本一冊、山崎闇斎、国民精神文化研究所蔵）、『中臣祓風水草管窺』（写本一冊、玉木正英、東京帝国大学神道研究室所蔵）がみえる。この際の説明者は河野省三である。

また、國學院大学図書館は、『神道大系所収参考書目集』（昭和二十年三月刷、教学練成所調査部⁽⁶⁶⁾）を撮影したフィルムを架蔵している⁽⁶⁷⁾。ここから、昭和二十年段階での、神道大系の計画案をうかがうことができる。

この資料に依拠すれば「神道大系」は、

一・首篇、二・古典篇、三・朝儀祭祀篇、四・神宮篇、五・神社篇、六・論説篇、七・註釈篇、八・文学篇、九・制度沿革篇、十・総記篇

で構成する計画案であつた。ただし、『神道大系所収参考書目集』には、註釈篇と文学篇は省略されている。

本資料に挙げられる書目をみると、中臣祓に関わるものは、論説篇に収録される予定であつたことがわかる。例えば「伊勢神道」には『皇天記』『守是解除抄』『中臣祓注抄』『元長修祓記』『氏常卿記録』がみえ、「吉田神道」には吉田兼俱・清原清賢・吉田兼見らの『中臣祓抄』、『垂加神道』には『中臣祓風水草』『中臣祓風水草管窺』などがみえる。

このほか、この時期の研究水準を示すものとして、『仮名別 中臣祓総目録』（謄写版）がある。同書には、中臣祓に関わる文献の名称と、その所蔵者が三百項目近く挙げられている。まとめられた年代や印刷者等はあきらかにしていない。ただし、都立中央図書館特別買上文庫所蔵の梅田義彦旧蔵本に「昭和十四年二月二十一日 梅田義彦」と墨書されていることから、この時期までにはまとめられたと考えられるし、東京大学史料編纂所架蔵本には、

「山本信哉編」と墨書されており、本書を山本信哉が編纂した可能性を示唆する。⁽⁷⁾

以上のことから、この時期までには、中臣祓研究の深化と、それに対する興味が深まっていたであろうと推測できる。

むすびにかえて―その後の中臣祓研究―

最後に、この後の中臣祓研究についてのべて、「むすび」にかえたい。

戦後の中臣祓研究では、まず岡田米夫「大祓詞から中臣祓詞への変化」⁽⁸⁾が挙げられる。岡田米夫は、中臣祓の諸本の主要部分を書写年代順に並べて比較することによって、本文の異同の背景にある時代の変化や信仰を見出している。また、岡田米夫は同論文で中臣祓の成立に陰陽師が関与するとしているが、この説は後に岡田莊司によって否定されている。⁽⁹⁾

戦後に刊行された資料としては、西田長男が解題・校訂した『吉田叢書

第四編 中臣祓・中臣秘抄』と『神宮古典籍影印叢刊三 神宮儀式 中臣祓』が注目される。前者は、「吉田流」の中臣祓及びその註釈について、詳細な解題が付されており、後者は神宮文庫が所蔵する「伊勢流」の中臣祓の註釈書が影印で掲載され、解題が付されている。これらは中臣祓に関する個別の文献についての研究が少ない現状から、参照される事が多く、「吉田流」・「伊勢流」の研究を進展させたものであるとすることができ。

このうち、岡田莊司の校注による『神道大系 古典註釈編八 中臣祓註釈』が刊行された。岡田は「解題」において、それまでの先行研究をふまえて、主に中世以前の中臣祓の展開についてまとめている。この中臣祓の展開は、おおむね、宮地直一の論じた中臣祓の展開に依拠している。また、同書には、中世以前の中臣祓研究を行う際に基本となる文献が収められた上で解題が付されており、『大祓詞註釈大成』とともに、中臣祓の展開を論じる際や中臣祓の研究を行う際の基本文献となっている。そして、現在、多くの中

臣祓に関連する論文が『神道大系 古典註釈編八 中臣祓註釈』及び、「解題」を参照しているようにみえる。

以上の研究史を、本研究プロジェクトの目的である「近代人文学において皇典講究所・國學院の果たした役割を明らかにする」ことに重ね合わせて考えれば、山本信哉、河野省三、宮地直一、西田長男、岡田莊司といった、中臣祓研究に重要な役割を果たした研究者が、國學院大學とかわりを持ち、その研究成果を世に問い続けてきた点は注目してよいであろう。

これは、國學院が、戦前・戦後ともに一貫して神道研究を進めてきたこと、中臣祓の展開を明らかにすることが、神道史学において注意されるべきテーマであったこととかわるものであろう。

本論で研究史を整理した中臣祓の展開について研究は、神道史学の一端を構成しているにすぎない。今後は、これ以外のテーマや神道史全体ではどうか、またそれは宮地直一以前の神祇・神道に関わる歴史叙述とどのように関わるのかについて考察をふかめてゆきたい。

註

- (1) 宮地直一 「神祇史」(皇典講究所國學院大學出版部、一九〇九年)。
- (2) 宮地直一 は、『神祇史』において梅園惟朝『国史神祇集』、樋口宗武『続国史神祇集』、栗田寛『神祇志料』などをあげて、それぞれを批評している。それを見ると、これらが事実の抜粋であると批判する一方で、材料を提供するものとしては評価している。栗田寛『神祇志料』については、「原因結果を説明し事実の聯絡を見てある所もある」(七頁)としており、宮地が「歴史」とよぶものは、事実間の因果關係を明らかにしたものといえる。
- (3) 『大祓詞註釈大成』上・中・下(内外書籍、一九四一・一九三八・一九三五年)。名著出版より一九八一年に復刻。本稿では名著出版版を用いる。
- (4) 河野省三 「中臣祓に就いて」(『神社協会雑誌』一一年一〇号、一九二二年)。
- (5) 前掲、河野省三 「中臣祓に就いて」一一頁。
- (6) 前掲、河野省三 「中臣祓に就いて」一二―一三頁。
- (7) 河野省三 「神道哲学より観たる中臣祓」(『國學院雑誌』二〇卷八号、一九一四

年。

(8) 河野省三「序」西寅夫『禊祓文庫第二冊 大祓詞概説』秋津庵文庫、一九三五年。

(9) 戸浪裕之氏の御指摘による。

(10) 山本信哉「土御門神道(一)」(五)『國學院雜誌』第一八卷三・四・九・一一号、一九二二年。

(11) 前掲、「土御門神道(二)」三三頁。このほか、山本は「大麻に就きて」(加藤玄智編『神社対宗教』明治聖徳記念学会、一九二一年)においても六字河臨法について述べて「当時神仏道の三教が能く調和して居たことを的確に証し得る事実でありまして、神道史の研究上実に大切な事柄であります」(三六五頁)とする。

(12) 前掲、宮地直一『神祇史』。

(13) 清原貞雄「神道史と五行讖緯の説」(芸文)六年四・七・十号、一九一五年。

(14) 清原貞雄「守札考」(郷土研究)三卷四・五号、一九一五年。

(15) 清原貞雄「神道沿革史論」(大鑑閣、一九一九年)。

(16) 「延喜式撰上一千年記念展覧会陳列目録」(皇国)三一九号、一九二七年。『國學院雜誌』三三卷三号、一九二七年。

(17) 河野省三(談)「中臣祓について」(『國學院雜誌』三三卷三号、一九二七年)。このなかで、河野は「大祓詞註釈書の目録」(四三・四七頁)全六六点を挙げている。

(18) 西寅夫「序」(『禊祓の研究』秋津庵文庫、一九三二年)一・二頁。

(19) 前掲、西寅夫『禊祓の研究』。

(20) 齋藤勳「王朝時代の陰陽道」(甲寅叢書刊行所、一九一五年)。

(21) 前掲、清原貞雄「神道沿革史論」。

(22) 前掲、山本「土御門神道」(大麻に就きて)。

(23) 西寅夫「中臣祓の文献について」(『國學院雜誌』三七卷三号、一九三一年)。

(24) 前掲、西寅夫『禊祓文庫第二冊 大祓詞概説』。

(25) 拙稿「宮地直一コレクションと『大祓詞註釈大成』——企画展「文献にみえる祓の世界」の報告——」(『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第一号、二〇〇九年)。

(26) 岡田莊司「覆刻版解説」(『大祓詞註釈大成』(下)名著出版、一九八一年)一頁。

(27) 「中臣祓注抄」(神宮司廳、一九三三年)。宮地直一の解説(『中臣祓注解説』)は付録として付された。『中臣祓注解説』の草稿及び入稿原稿は、現在、都立中央図書館・特別買上文庫所蔵『雑纂』に合綴されている。『雑纂』は梅田義彦旧蔵で宮地直一の原稿等が綴られている。ただし、管見の限り、『中臣祓注解説』の原稿そのものは宮地の筆ではなく、それに宮地が書き入れをしている。

(28) 拙稿「宮地直一コレクションと『大祓詞註釈大成』——企画展「文献にみえる祓の世界」の報告——」(前掲)において指摘した。

(29) 『三国最上之祓』(明治書院、一九三四年)。なお、所蔵者の鈴鹿太郎は、吉田家の家老的な役割を果たしていた鈴鹿氏の子孫である。「三国最上之祓」は中臣祓のことである。

(30) 御巫本「中臣祓」(明治書院、一九三八年)。なお、御巫本「中臣祓」は、当時、御巫清白が所蔵していたものである(現在は神宮文庫所蔵(第一門一六三三号))。二紙別筆の中臣祓を裏打ちして一巻にしたもの。その第一は、「遍照金剛撰」とする中臣祓を省略した略祓、第二は、「中臣祓注抄」(貞治五年写、称名寺聖教(称名寺所蔵、神奈川県立金沢文庫保管)『大中臣祭文』(鎌倉時代写)、金剛寺所蔵「大祓祝詞残欠」と共通する部分を含む注を付した略祓である。

(31) 神書叢刊第二は、『三十番神絵像説』(明治書院、一九三八年)。

(32) 「中臣祓注解説」は、前掲。御巫本中臣祓説は、前掲、御巫本「中臣祓」(複製)の解題。『三国最上之祓の研究』は『三国最上之祓』(前掲)の付録である。

(33) 宮地直一「神祇史大系」(明治書院、一九四一年)。

(34) 西田長男「第五卷 中世編(下)のために」『日本神道史研究』第五卷(講談社、一九七九年)四・五頁。宮地直一コレクションのうち、吉田家旧蔵本として吉田兼敦「延喜式神名帳鈔」(宮地・一八二八)、吉田兼俱「八神啓白文」(宮地・一六四五)、梵舜写「三元表白」(宮地・一七九九)、吉田兼見「諸事書拔」(宮地・一八二九)がある。また、調査の際に撮影された写真として、吉田兼俱自筆「唯一神道名法要集」、吉田家本「延喜式」巻九・十がある(『國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト編「宮地直一博士写真資料目録」』國學院大學日本文化研究所、二〇〇五年)。なお、後者は、現在、天理大学附属天理図書館吉田文庫の所蔵となっている。これは卷子本であるが、写真は冊子本であり、宮地の調査後、改装されていることがわかる。この改装については、田中卓が「天理図書館善本叢書和本之部十三卷 古代史籍続集」(天理大学出版部、一九七五年)の「解題」でふれている(一一頁)。

(35) 前掲、宮地直一「三国最上之祓の研究」三七・四〇頁。

(36) 両書ともに鈴鹿太郎所蔵本。

(37) 西田長男は、戦後、宮地の遺稿集の編纂に携わり、会長をつとめた國學院大學神道史学会は、『宮地直一博士三十年祭記念論文集 神道史の研究』(叢文社、一九八〇年)を編纂している。

(38) 西田長男「慶長勅版中臣祓と吉田家に於ける神書の開版」(『書誌学』昭和一三年一・二月号、一九三八年)のちに「神道史の研究」(雄山閣、一九四三年)『日本神道史研究』五卷(講談社、一九七九年)に所収。このテーマについて西田は「神書の古版本二一三」(『神道宗教』四六号、一九六七年)においても論じており、『日本神道史研究』五卷に収録されたものは、これを踏まえたもので、大幅に改稿さ

れている。

- (39) 吉田神社編『吉田叢書 第一編 神道大意』(内外書籍、一九四〇年)。
- (40) 西田長男「神道史の理念」のうち「三 仏家神道の成立―罪の概念を通路として」(『新講大日本史 第一三巻 日本思想史(上)』雄山閣、一九三九年)。後に『神道史の研究』(前掲)、『日本神道史研究』第一巻(講談社、一九七八年)にも収録。本稿では『新講大日本史』第三巻を用いる。
- (41) 前掲、西田長男「仏家神道の成立―罪の概念を通路として」八六頁。
- (42) 同右。
- (43) 前掲、西田長男「仏家神道の成立―罪の概念を通路として」八七―八八頁。
- (44) 岡田莊司「解題」『神道大系 古典註釈編八 中臣祓註釈』(神道大系編集会、一九八五年) 一九二〇頁。
- (45) 西田長男「神道の死の観念と仏教との関係―三種大祓の成立を通路として―」(『仏教研究』四巻一号、一九四〇年)のち、『日本神道史研究』第五巻(講談社、一九七九年)に収録。
- (46) 河野省三『日本精神叢書二五 中臣祓と民族精神』(文部省思想局、一九三七年)のち『日本精神叢書二二 同(内閣印刷局、一九四〇年)』。また、河野省三は『神道文化史』(地人書館、一九四〇年)においても、吉田神道とのかかわりにおいて、吉田神道が中臣祓を重視し、宣揚したことは神道文化の普及上、注意すべきであるとする(一〇六頁)。
- (47) 萩原龍夫「中臣祓の史の変遷」(『史潮』第二一年四号、一九四二年)。
- (48) 中村直勝「大祓詞の一断簡」(『中外日報』昭和十三年(一九三八)一月一日号)。
- (49) 前掲、「延喜式撰上」一千年記念展覧会陳列目録」。
- (50) 「国体及び神道に関する書籍展覧会目録」(『國學院雑誌』四二巻六八号、一九三六年)。このほか、当日、配布されたと思われる資料として「国体及び神道に関する書籍展覧会目録」(國學院大學道義研究室、同国史研究室、同国文研究室、皇典講究所、一九三一年)がある。
- (51) 「国体 神道に関する重要書籍展覧会目録」(『國學院雑誌』四二巻一二号、一九三六年)。
- (52) 京都帝国大学文学部国史研究室『神祇並神道史に関する展覧目録』(一九三六年)。
- (53) 京都帝国大学文学部国史研究室『第二回神道史資料展覧目録』(国史研究室、一九三七年)、同『第三回神道史資料展覧目録』(国史研究室、一九三八年)。
- (54) 展示された鈴鹿三七所蔵「中臣祓」(天文五年 吉田兼右自筆、仮名書本)について宮地は、『大祓詞註釈大成』の「仮名付本 中臣祓」(一五頁)や『三國最上之祓の研究』(一五頁)において言及している。『宮地直一博士写真資料目録』には、中臣祓に関わる写真を集めたアルバムの写真が掲載されている。それには同書の写真もある(資料番号一三二七―一三二八)。このほか、鈴鹿太郎所蔵『三國最上之祓』(資料番号一三〇〇―一三一六)、同『六根清浄太祓』(資料番号一三二九―一三四六)、中臣祓(元和六年、梵舜筆)(資料番号一三四七―一三五六)、神宮文庫所蔵「御祓本」(「守晨・御祓本」)部分(資料番号一三五七―一三五八)、同「御祓本」(「御祓本・長本秘記」)部分(資料番号一三五九―一三六三)、鈴鹿太郎所蔵「平仮名本 中臣祓」部分(資料番号一三六四)、竹内文平所蔵「中臣祓」(慶長二十年、梵舜奥書)部分(資料番号一三六五―一三六六)、鈴鹿太郎所蔵「中臣祓」(「仮名付本 中臣祓」(吉田兼見写)資料番号一三六七)、宮地直一所蔵「中臣祓」(旧羽田野本)(資料番号一三三八)の写真がある。なお、「中臣祓」(旧羽田野本)の原本は、現在、國學院大學学術資料館(神道資料館)が所蔵する「羽田野神主家文書」に含まれ、「おはらいの文化史」においても展示した。
- (55) 神宮皇學館『神道資料展覧会目録』(神宮皇學館、一九三二年)。
- (56) 石川県図書館協会編『神祇二関スル展覧会目録』(石川県図書館協会、一九三三年)。この展示では、宮地直一が顧問として、展示の指導にあたっている(同書「序」二頁。小倉学述「神社の縁起書物語」(加能神社縁起書展に因みて) 石川県中央図書館、一九五五年、一頁)。
- (57) 『紀元二千六百年奉祝 神道美術展覧会図録』(大倉集古館、一九四一年)。この展覧会には、伊東忠太、宮地直一らが計画段階から関与していた(「序」)。
- (58) 佐伯有義編『神道分類総目録』(春陽堂書店、一九三七年)。
- (59) 加藤玄智編『神道書籍目録』(明治聖徳記念学会、一九三八年)。
- (60) 下中弥三郎編『神道大辞典』全三巻(平凡社、一九三七―一九四〇年)。
- (61) 井上哲次郎「神道大蔵經」編纂の必要に就いて(『東亜の光』二二巻七号、一九二七年。島蘭進・磯前順一編、シリーズ日本の宗教学2『井上哲次郎集』九巻、クレス出版、二〇〇三年所収)、同「再び「神道大蔵經」編纂に就いて」(『東亜の光』二二巻九号、一九二七年、前掲、『井上哲次郎集』九巻所収)。
- (62) 加藤玄智「序」(『神道書籍目録』(前掲) 四頁)。
- (63) この事業は、戦争が悪化した事により頓挫する。現在の『神道大系』は、西田長男が松下幸之助に話をもちかけ、昭和五十年から、編纂が開始されたものである。
- (64) 志田延義「神道大系編纂の前身と神楽歌の淵源」(『財』神道大系編纂会 記念誌「神道大系編纂会、二〇〇八年」八三―八四頁。大野健雄「神道大系二二〇巻完結―二〇年の歳月を要して―」(前掲、『財』神道大系編纂会 記念誌) 九三―九四頁。
- (65) 虎尾俊哉「『神道大系』の学術的意義」(前掲、『財』神道大系編纂会 記念誌) 七三―七四頁、大野健雄「神道大系二二〇巻完結―二〇年の歳月を要して―」、九四頁。

- (66) 「三笠宮崇仁親王殿下 閑院宮春仁王殿下 台覧国民精神文化資料目録」(『国民精神文化』八巻四号、一九四二年) 四〇六―四〇九頁。
- (67) 国民精神文化研究所旧蔵本は、現在、国文学研究資料館に所蔵される。宮本誉士氏の御教示による。
- (68) 国民精神文化研究所は、昭和十八年十一月に国民錬成所と合併して教学錬成所となった。
- (69) 國學院大学図書館、マイクロフィルム・三六四「神道大系所収書籍目録」。原本所蔵所は「河野家」である。さらに、不鮮明ではあるが、河野省三の書入れとみられるものもある。
- (70) 都立中央図書館・特別買上文庫(梅田義彦旧蔵資料・二二八五)、國學院大學河野文庫所蔵(河野・三二四〇)、東京大学史料編纂所架蔵本。河野本は、河野省三によるおびただしい書き込みがあり、東京大学史料編纂本は、山本信哉の編纂と登録される。
- (71) 山本は、大正二年十月より東京帝国大学史料編纂所編纂官補、同十四年五月から昭和十一年三月まで同編纂官をつとめている。
- (72) 岡田米夫「大祓詞から中臣祓詞への変化」(『山田孝雄追憶史学語学論集』宝文館出版、一九六二年)。このほか、岡田米夫には『諸祓詞集』(神社本庁、一九六一年)や『大祓詞の解釈と信仰』(国民神道社、一九六四年)などがある。
- (73) 岡田莊司「私祈禱の成立―伊勢流祓の形成過程―」(『神道宗教』一一八号、一九八五年)。
- (74) 西田長男解題校訂『吉田叢書 第四編 中臣祓・中臣祓抄』(叢文社、一九七七年)。この編纂背景については、岡田莊司「吉田神道と西田先生の思い出」(『神道及び神道史』四二・四三号、一九八五年)を参照した。
- (75) 『神宮古典籍影印叢刊三 神宮儀式 中臣祓』(皇學館大學、一九八三年)。
- (76) 岡田莊司校注『神道大系 古典註釈編八 中臣祓註釈』(神道大系編纂会、一九八五年)。